沖代地区条里跡　上安地区・竹ノ下地区
中津城本丸南西石垣(Ⅳ)

2004年度　中津地区遺跡群発掘調査概報17

中津市文化財報告 第37集

2005

中津市教育委員会

例　言

一、本書は中津市教育委員会が2004年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
一、調査は2004年度国宝重要文化財等保存整備事業費および2004年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査主体　　中津市教育委員会
　　調査責任者　影木荘一郎（中津市教育委員会教育長）

調査員	高瀬　哲郎（名護屋城博物館）	
調査指導	渋谷　忠章（大分県教育庁文化課参事　兼　課長補佐）	
	小林　昭彦（　　同　　主幹　兼　埋蔵文化財係長）	
調査事務	尾畑　豊彦（中津市教育委員会市民文化センター課長	平成17年２月28日まで）
	國分　重喜（中津市教育委員会文化振興課課長	平成17年３月１日から）
	田中布由彦（中津市教育委員会市民文化センター係長	平成16年12月31日まで）
	保科　　眞（　　同　　係長	平成17年１月１日から
		平成17年2月28日まで）
	（中津市教育委員会文化振興課　　係長	平成17年3月1日から）
	富田　修司（　　同　　主査）	
調査担当	高崎　章子（　　同　　主査）	
	花崎　　徹（　　同　　主任）	
	浦井　直幸（　　同　　嘱託）	

上記の他、北垣聰一郎氏（元東大阪短期大学教授）、梅崎恵司氏、佐藤浩司氏（北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室学芸員）、五島昌也氏（佐賀県教育庁文化課）、江藤和幸氏（宇佐市教育委員会）他多数の方々よりご指導いただいた。厚く御礼申し上げます。

一、沖代地区条里跡の調査は浦井直幸が、中津城の調査は高崎章子と浦井直幸が行った。
一、本書の執筆、編集、写真撮影は第1章、第３章を高崎が、第2章を浦井が担当した。
一、実測、製図、拓本等は上記担当者の他、塩谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子が行った。
一、現場作業及び遺物整理は下記の皆さんの協力による。
山縣信夫、石塔美代子、中村香代子、田中トミ子、瀬口礼子、中村恵美子、阿部恵子、川口政代、江藤清子、中島祐子、田原文子、塩谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子

目　　次

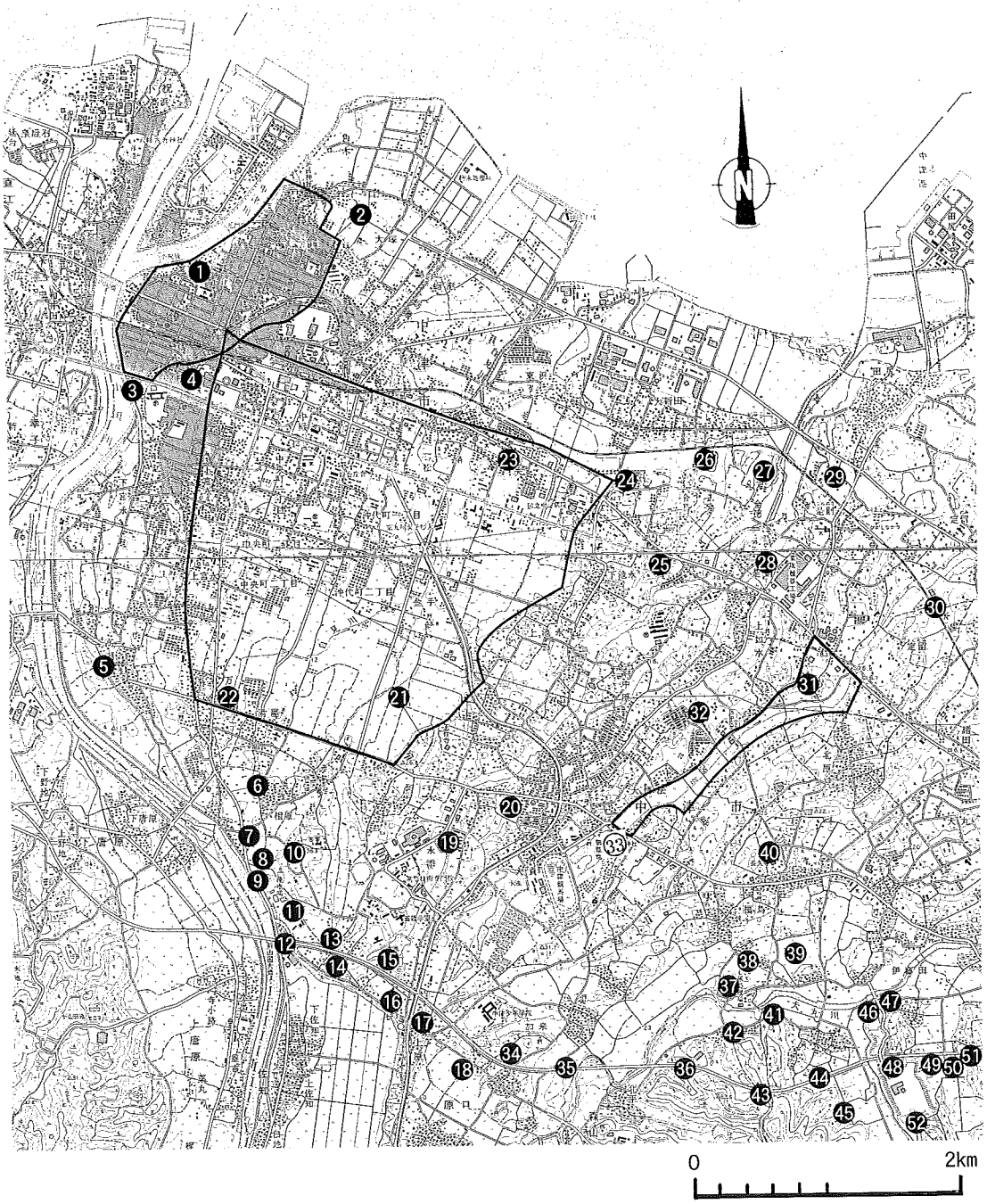
第１章　地理と歴史的環境 …… 1

第２章　沖代地区条里跡 …… 3
1. これまでの調査 …… 3
2. 上安地区 …… 4
3. 竹ノ下地区 …… 5
4. 小結 …… 7

第３章　中津城本丸南西石垣（Ⅳ） …… 8
1. 中津城の歴史と石垣について …… 8
2. 調査に至る経緯 …… 9
3. 工事の概要 …… 9
4. 中津城の石垣 …… 10
5. これまでの調査の概要 …… 14
6. 16年度調査の概要 …… 14
(1) E面石垣の礎石建物 …… 14
(2) 椎ノ木門南調査区 …… 20
7. 中津城跡出土軒瓦の型式分類 …… 23
(1) 軒平瓦 …… 23
(2) 軒丸瓦 …… 28
8. まとめ …… 29

写真図版 …… 31

第１章　地理と歴史的環境



1．中津城
2．中津城下町遺跡
3．高畑遺跡
4．豊田小学校遺跡
5．高瀬遺跡
6．相原廃寺
7．三口遺跡
8．鶴市神社裏山古墳
9．坂手隈横穴墓群
10．相原山首遺跡
11．弊旗邸古墳
12．上ノ原横穴墓群
13．勘助野地遺跡
14．上ノ原平原遺跡
15．大池南遺跡
16．上ノ原稲荷塚遺跡
17．清次郎原遺跡
18．槇遺跡
19．長者屋敷遺跡
20．東浦遺跡
21．沖代地区条里跡
22．五唯地区
23．矢永地区
24．亀山古墳
25．石堂池遺跡
26．ガラヌノ遺跡
27．全徳遺跡
28．舞手川流域遺跡
29．是則遺跡
30．定留貝塚
31．原遺跡
32．大悟法条里
33．薦神社
34．黒水遺跡
35．大坪遺跡
36．森山遺跡
37．福島遺跡
38．福島地下式横穴
39．城土遺跡
40．田丸遺跡
41．洞ノ上横穴墓群
42．岩井崎横穴墓群
43．洞ノ上窯跡
44．安平遺跡
45．才木遺跡
46．城山横穴群
47．城山古墳群
48．城山窯跡群
49．草場窯跡
50．伊藤田穂屋遺跡
51．踊ヶ迫窯跡群
52．大谷窯跡

第１図　中津市内主要遺跡分布図（S=1/50,000）

中津市は、大分県北部、福岡県との県境の商業都市で、2005年３月１日、旧下毛四カ町村と合併し、人口86,000人、面積490㎢の新中津市が誕生した。山国川の源流から河口まで、山国川の恵みを共有してきた市町村の合併である。

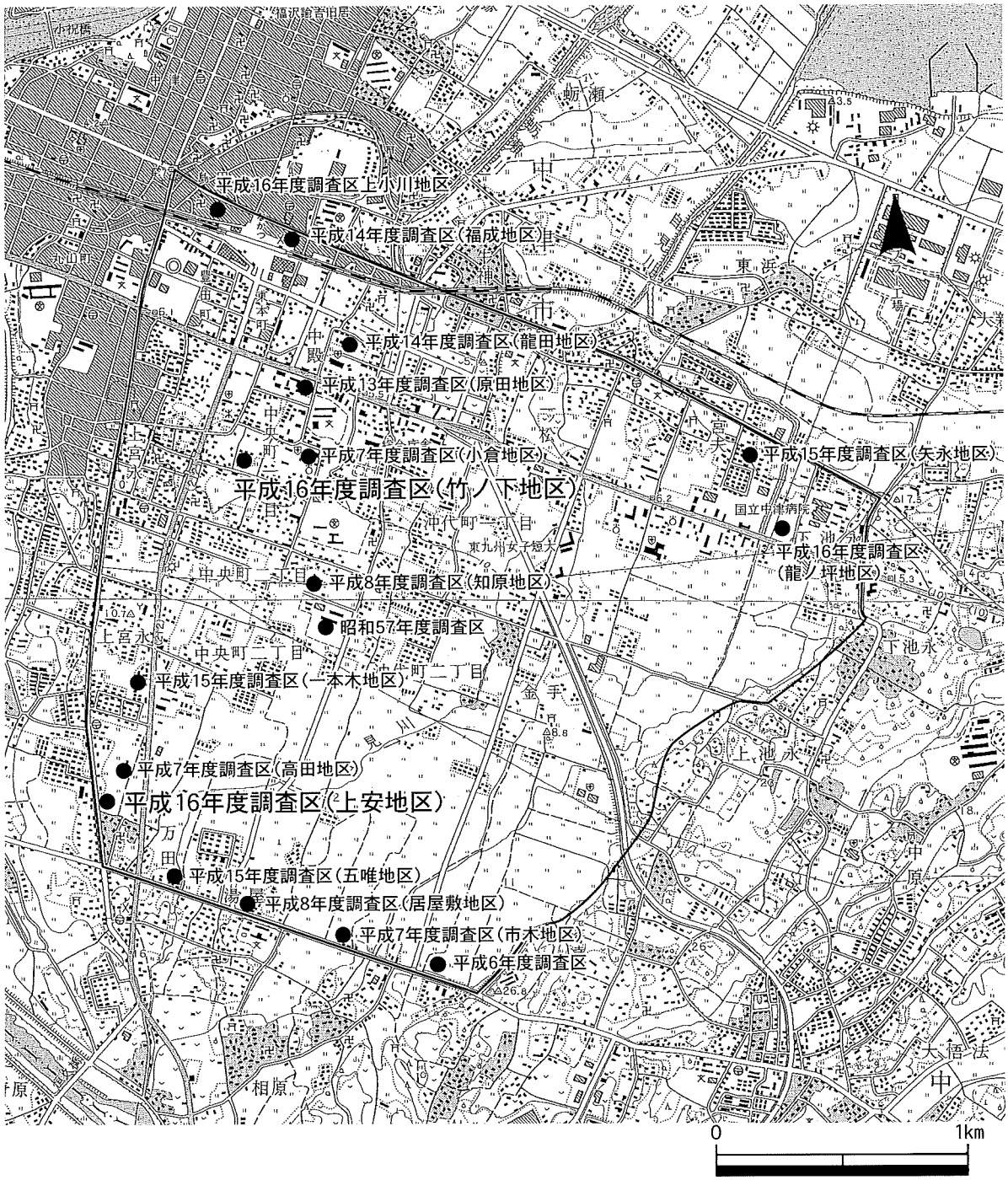
旧中津市内は一級河川の山国川河口に位置し、北は遠浅の周防灘を望む。山国川の造る扇状地「沖代平野」と、市の東南をしめる洪積台地「下毛原台地」とに分かれる。東は古代強力な政治力を誇った宇佐八幡宮が座す宇佐市に隣接している。

市内の旧石器時代は才木遺跡や大坪遺跡で石器を確認できるのみである。縄文時代では早期後半に黒水遺跡で陥し穴が検出された。遺跡数が増大するのは後期からである。犬丸川沿いの福島台地には、入垣貝塚を伴う集落のボウガキ遺跡、山国川沿いには三光村の自然堤防上に佐知遺跡の集落がある。山国川河口付近では高畑遺跡で土偶が発見された。弥生時代になると、遺跡は台地上や沖代平野内の低地でも確認できる。前期後葉から中期初頭、山国川沿い低丘陵上の上ノ原平原遺跡で、貯蔵穴群が検出された。中期になると犬丸川沿いの福島遺跡で集落が展開し、住居跡、濠と二列埋葬の土坑墓群が確認されている。また中津市と三光村にまたがる森山遺跡では前期末から後期初頭までの集落全域を検出できた。古墳時代には沿岸部や山国川沿いに古墳、横穴が築かれ、微高地には住居が作られる。沖代平野の低湿地では水田も確認されている。生産遺跡としては南東部の山地に大規模な窯跡群が作られ、６世紀後半から８世紀にいたるまで、須恵器、瓦などが生産された。

古代史上主要な遺跡は市内南部を東西に横切る推定古代官道沿いに集中する。この道は宇佐八幡宮へ向かう勅使が通る通称「勅使街道」であり、当時のメインストリートである。道の南、山国川の東岸に、白鳳寺院の相原廃寺跡がある。また沖代平野では、おそくとも８世紀前半に県下最大級の沖代条里の地割りが制定された。条里は年々開発の波に押されているが、現在でも方形の区割りをたどることができる。この条里を見下ろす低台地上に、下毛郡衙正倉に比定される長者屋敷遺跡がある。長者屋敷と相原廃寺の間には、古墳時代から近世まで続く墓地群相原山首遺跡があり、古代の蔵骨器を持つ方墳は郡司の墓に推定されている。

犬丸川沿いでは鎌倉時代の集落が検出された。特に前田遺跡では井戸から青磁、白磁、瓦器碗、土師器などの良好な一括資料が得られた。中世の建久年間には、宇都宮氏が豊前に入り、その庶流が下毛郡の地頭職についた。15、16世紀には市内各地に堀や土塁をもつ豪族居館が作られ、各所にその痕跡を残す。近年の調査では、石堂池遺跡、定留遺跡、諸田遺跡などで城館跡が新たに確認されている。長者屋敷遺跡にも16世紀に八並城が造られ、堀や土塁は今もたどることができる。宇都宮重房は野仲郷を本貫とし、以後16世紀末まで、野仲氏が勢力をふるった。八並城も野仲氏に攻め落とされている。しかし、16世紀末、秀吉から豊前をもらった黒田氏が山国川の河口に中津城を築き、宇都宮氏をはじめとする地元の豪族を次々に打ち破り、江戸時代を迎えた。中津城は一国一城令後も生き残り、河口の城を中心に城下町が発展していった。現在城内に当時の建物は残っておらず、石垣や堀が往時をしのばせるのみである。近年、殿町、諸町などで城下町の調査が相次いでいる。中津城の石垣も平成13年より復元工事にとりかかっており、中津城と城下町の姿が徐々に解明されてきている。

第２章　沖代地区条里跡



第２図　沖代地区条里跡周辺図（S=1/25,000）

１．これまでの調査

旧中津市西部を占める沖代平野には、「沖代地区条里跡」と呼称される県下最大規模の条里遺構が広がる。条里は遅くとも８世紀初頭には施行され、条里の限界は、北は日豊線沿いの県道、南は勅使街道、東は沖積平野と下毛原台地の境、西は国道212号線と並行して走る旧国道と考えられている。現在でも条里東部をはじめとして、方形や長地形の地割が容易に観察できる。しかし、条里遺構は近年の開発の波に押され次第にその景観を失いつつある。このため、中津市教育委員会では平成７年度より国庫補助を受け緊急の民間開発に伴う調査を実施してきた。平成7年度市木地区で行われた調査

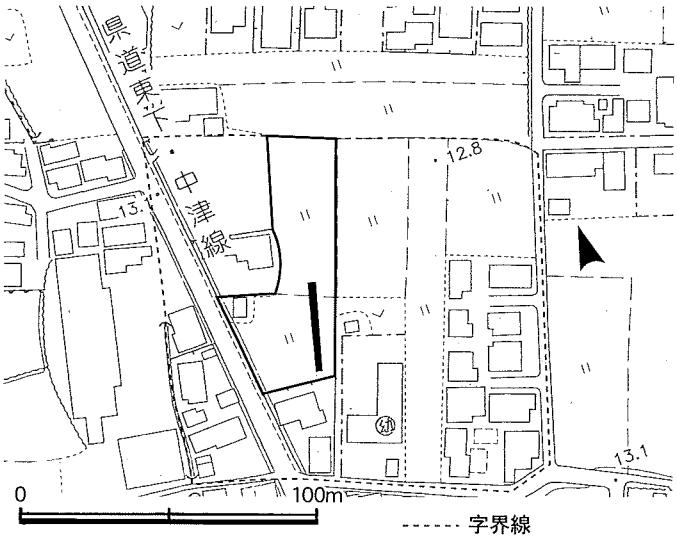
では水田祭祀遺構、平成8年度居屋敷地区では住居跡、平成15年度五唯地区では掘立柱建物跡が検出された。これらの遺構は、その時期が6世紀中頃～後半段階であることやいずれも勅使街道沿いに分布することからセットとして捉えることができる。また、五唯地区では12世紀中頃～後半の土壙も検出された。平成13年度原田地区では時期不明ながら畦や溝、稲株跡とされる小円孔が確認され、平成14年度龍田地区では古代にまで遡る可能性のある水田跡が確認されている。昭和57年度調査では弥生時代の水田から足跡も検出されている。既往の調査結果によって、沖代平野には条里施行以前の弥生・古墳時代に既に水田や集落が存在し、条里施行を経て、古代には集落も存在していたことが明らかになっている。

今年度は、国庫補助を受け上安地区、竹ノ下地区の調査を行った。また、中津市の単費で上小川地区、龍ノ坪地区の調査を実施した。本報告では上安地区、竹ノ下地区の報告を行う。

2．上安地区

(1) 調査の経過（第３・４図）

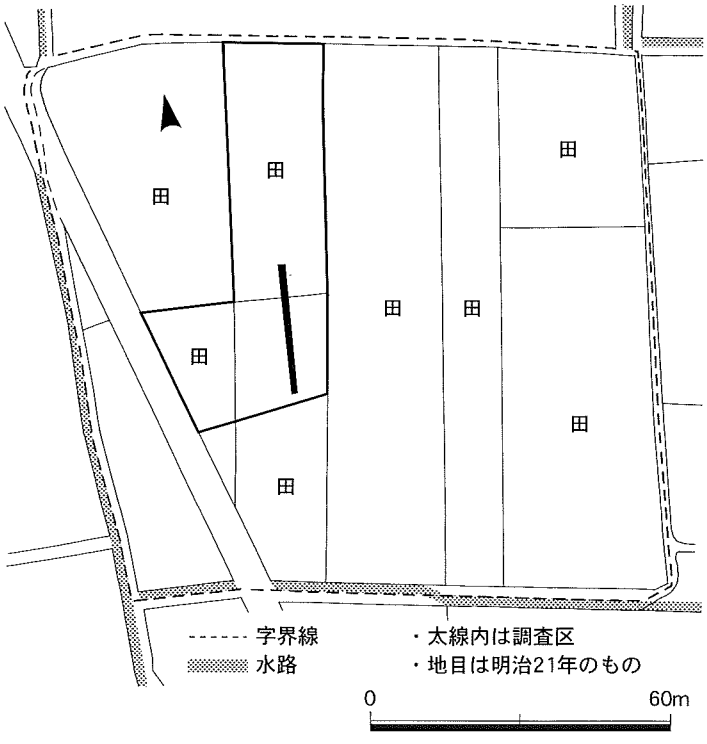
沖代地区条里跡上安地区は、中津市大字万田に所在する。今回、当地区に民間による集合住宅建設の計画が立てられたため、事前に確認調査を実施した。建設予定地周辺は明治21年の字図によると条里方形地割が見られる。しかし、現在は住宅建設等で田の数も減り、往時の面影は僅かに残る田地に見るのみである。



第３図　上安地区トレンチ位置図（S=1/2,500）

(2) 調査の方法と成果

調査は集合住宅建設予定地内の建物建設域のみにトレンチを設定する方法をとった。重機による掘り下げを行い、幅２m、長さ32m、深さ１mのトレンチを１本設定した。その結果、遺構は検出されず、遺物はビニール袋１袋分の須恵器・土師質土器などを検出した。土層は、地表面から下層20cmは現水田層であり、それより下層13cmは灰褐色粘質土、その下4cmは灰黄褐色粘質土、その下10cmは灰褐色粘質土、その下10cmは灰黄色粘土、その下15cmは暗灰色粘質土、それより下層は地山と思われる灰茶褐色粘質土であった。地山は含水性が高く、常に水が染み出す土質であった。各層毎に遺構検出を試みたが、古代の水田や畦等の遺構の

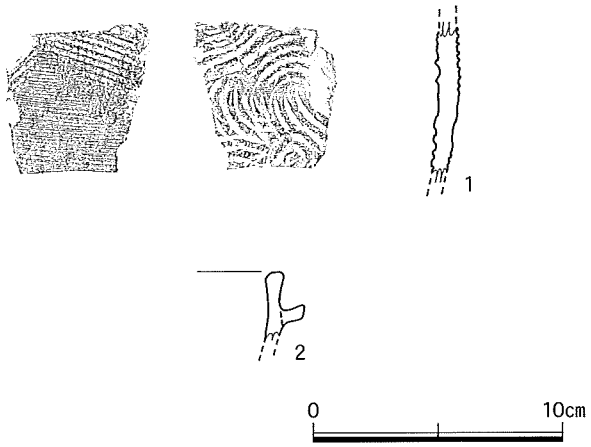


第４図　上安地区全体図（S=1/1,500）

発見には至らなかった。よって、遺跡は存在しないと判断し調査を終了した。

(3) 遺物

第５図はトレンチ一括遺物である。１は須恵器片。内面に同心円文が残り、外面に平行タタキが施される。色調は内外面ともに灰色。２は鍔付き鍋。口縁端部上面に平坦面をもち、口縁部下に付く鍔はその先端をやや右上方に上げる。色調は内外面ともに淡黄色、胎土に微量の角閃石を含む。



第５図　上安地区出土遺物実測図（S=1/3)

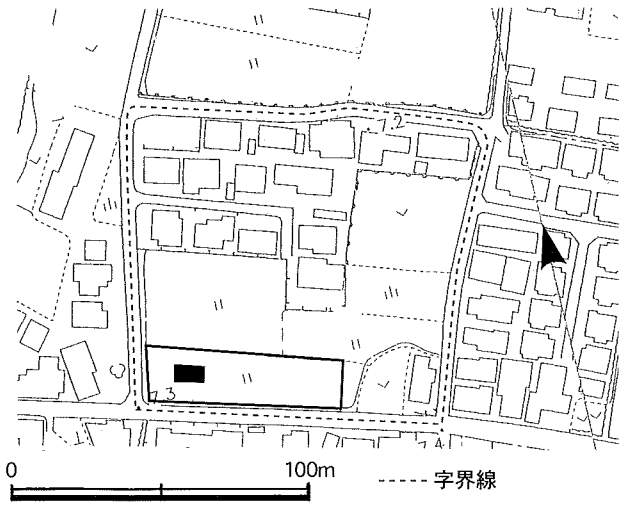
３．竹ノ下地区

(1) 調査の経過

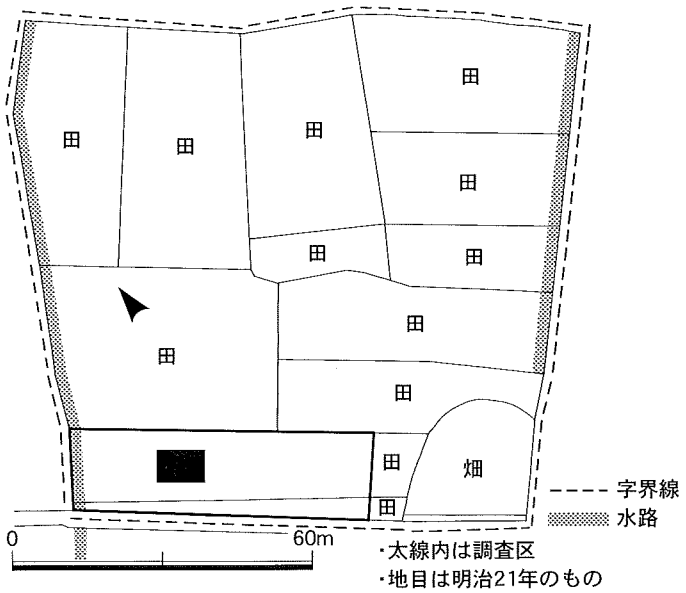
沖代地区条里跡竹ノ下地区は、中津市中央町１丁目に所在する。今回、民間による集合住宅建設計画が立てられたため事前に確認調査を実施した。字図では調査地周辺には方形地割が明瞭に残る。当地区も宅地開発が進み、地割の中に占める田地の割合は減少しつつある。

(2) 調査の方法と成果（第６・７図）

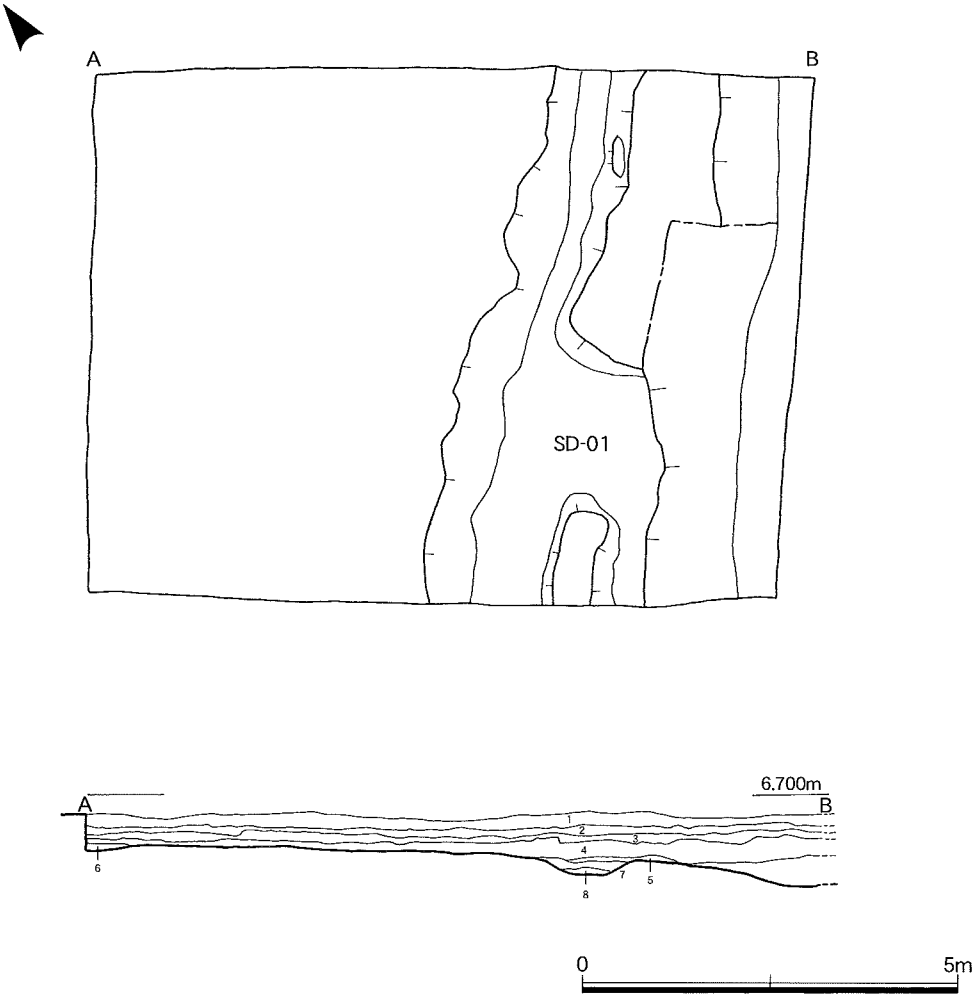
調査は集合住宅建設予定地内の建物建設域のみに重機によるトレンチを設定する方法をとった。幅２m、長さ７mのトレンチを東西に３本一列に並ぶ形で設定した。その結果、西側のトレンチから溝状遺構一本を検出した。このため、西側トレンチを拡張し調査を実施した。



第６図　竹ノ下地区トレンチ位置図（S=1/2,500）



第７図　竹ノ下地区全体図（S=1/1,500）



第８図　竹ノ下地区トレンチ平面図、土層図（S=1/100）

(3) 層序（第８図）

１は暗茶褐色砂質土。現水田層。層下位に３～４cm幅の床土と思われる赤褐色土を見る。２も１層と同色。水田層と思われるが１層で確認できた赤褐色土は存在しない。炭･焼土を小量含む。３は暗黄褐色粘質土。４は黒褐色粘質土。中世の土器片を内包する。しまりは弱く、鉄分が斑に入る。５は４層と同色だが、鉄分は入らない。６は黄褐色粘質土。７は黒褐色砂質土であり、溝埋土である。土器片・炭･白色粒が中量混じる。８は黒褐色砂土であり、溝埋土。土器片・炭を小量含む。

(4) 遺構（第8図）

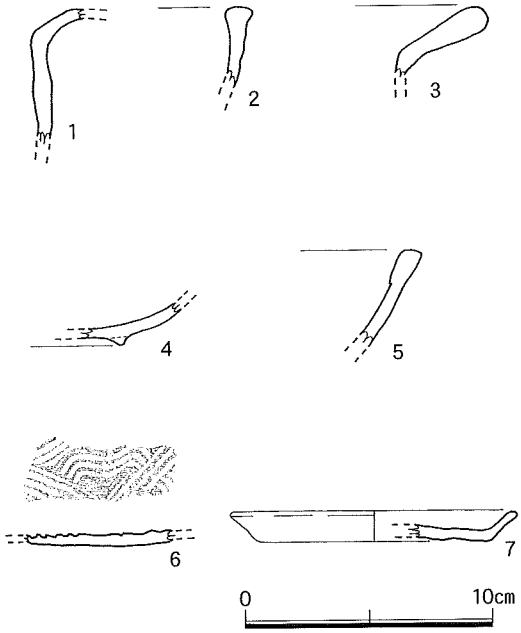
溝（SD-01）

調査区西よりに位置する。最大幅170cm、深さ約20～30cm、断面U字状を呈す。溝の東側肩が中央付近で途切れる。意図的に溝の肩を切ったものなのかは判断できなかったものの、この溝は下層埋土が砂土であることから水路として機能していたものと思われる。また、調査区東側は地山が落ち込む地形であることから、仮に地山の落ちた地点に水田が存在したと考えれば、東側肩の切れ目は水を下

の水田に誘導するために切られたものとも考えられる。溝からは古墳時代もしくは古代のものと思われる土師器・須恵器片を検出したが、時期比定できる資料は存在せず、溝の時期の特定には至っていない。

(5) 遺物（第９図）

第９図は溝、４層、調査区から出土した遺物の実測図である。１は溝出土遺物で須恵器の甕。色調は内外面共に淡黄色、胎土に角閃石を小量含む。２・３は４層出土遺物で、２は鉢の口縁部か。色調は淡燈色、焼成良好。３は鍋の口縁部か。色調は茶褐色、胎土に中量の角閃石を含む４は黒色土器もしくは瓦器椀の底部。高台には断面三角形の粘土を付す。５は鍋の口縁部か。焼成良好。６は擂鉢の底部。内面に花弁状の櫛目を施す。７は土師質土器小皿。口縁端部は丸く、体部はやや内湾し底部へ至る。底部は糸切り離し。色調は内外面共に暗灰色である。



第９図　竹ノ下地区出土遺物実測図（S=1/3）

４．小　結

今回の調査の結果、上安地区では遺構の検出に至らなかったものの、含水性の高い地山を確認できた。この地山の特徴は、上安地区の北250mの地点で平成７年度に行われた高田地区と同様の傾向を示す。また、竹ノ下地区では溝状遺構の検出を見た。時期は特定できなかったものの古墳時代もしくは古代の遺構と考えられよう。また、その遺溝を覆う層からは中世の遺物が検出された。過年度の沖代地区条里跡の調査でも中世の遺物片は確認されており、今回の調査でも同様の傾向が確認できた。

今後の調査では古代の遺構は勿論、中世遺構の検出にも留意して調査を行っていきたい。

<参考文献>

- 「沖代地区条里跡」『中津市文化財調査報告第17集』中津市教育委員会　1996
- 「沖代地区条里跡（Ⅱ）」『中津市文化財調査報告第18集』中津市教育委員会　1997
- 「沖代地区条里跡原田地区」『中津市文化財調査報告第27集』中津市教育委員会　2002
- 「沖代地区条里跡福成・龍田地区」『中津市文化財調査報告第30集』中津市教育委員会　2003
- 「沖代地区条里跡矢永地区・五唯地区」『中津市文化財調査報告第34集』中津市教育委員会　2004

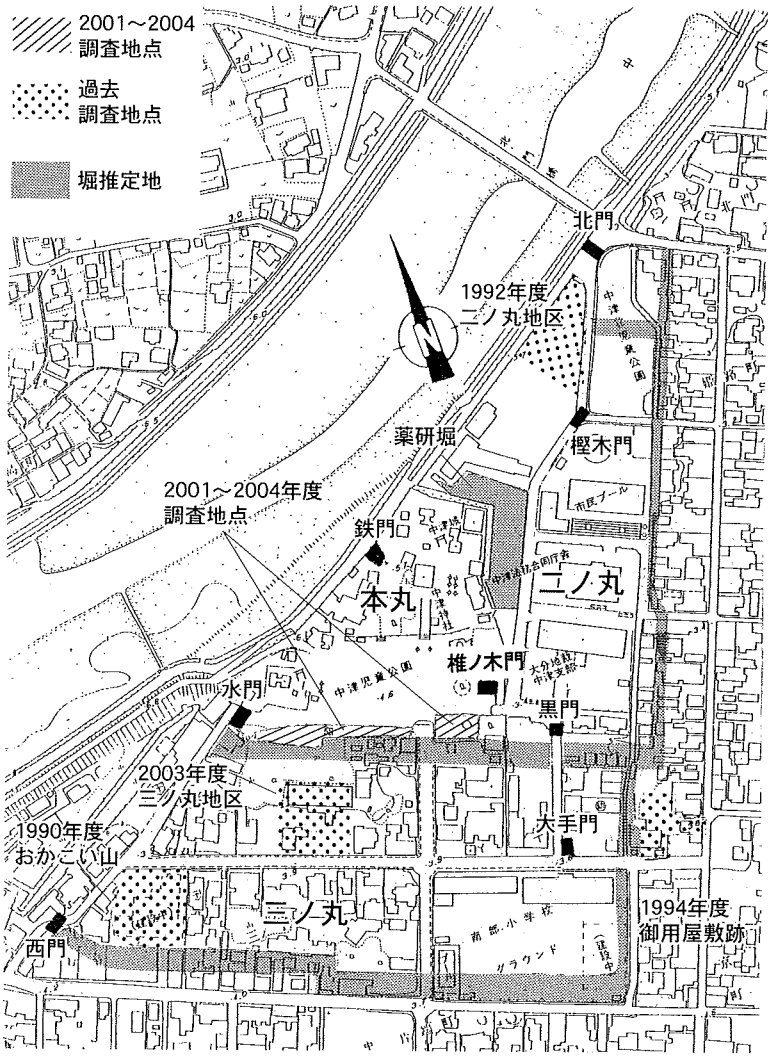
第３章　中津城本丸南西石垣Ⅳ

１．中津城の歴史と石垣について

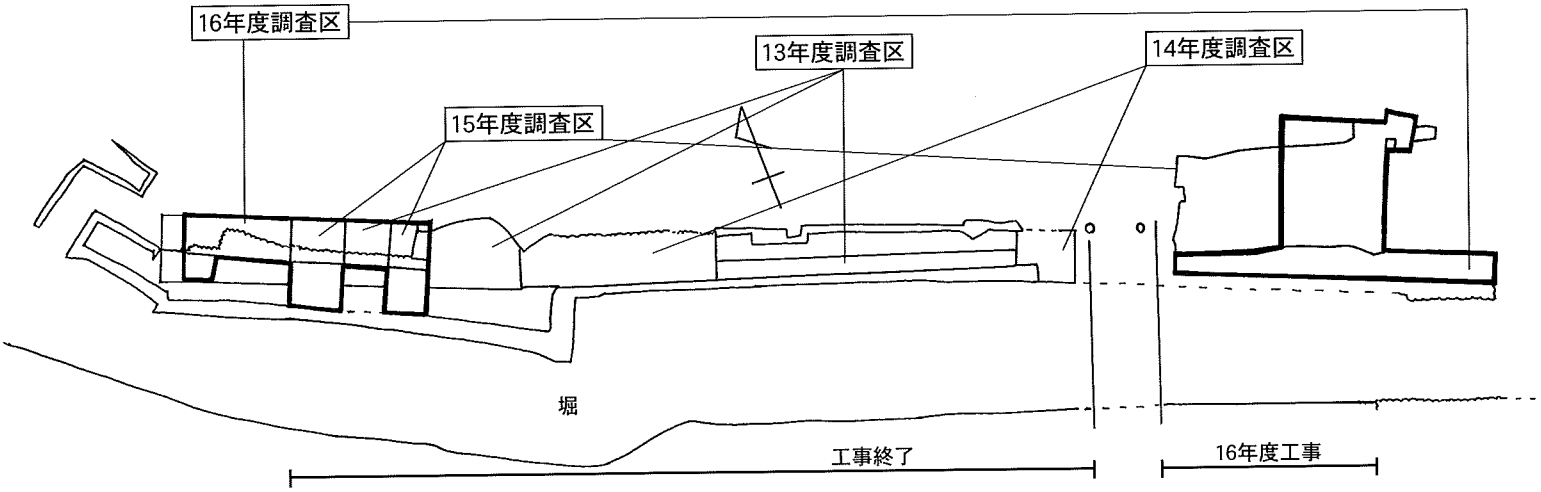
豊臣秀吉は1587年、九州平定のため、子飼いの武将達を九州に入国させ、翌1588年彼らによって九州各地に初めて近世城郭が構築される。そのうちの一つである中津城は黒田孝高によって築城された。黒田孝高は豊前六郡の領主として下毛郡に入国し、はじめは大塚山の砦を修築して根拠地としていたが、天正16年中津江太郎の居城であった丸山城を修補し、入城した。黒田氏は1600年筑前へ転封となり、細川忠興が入国する。忠興は翌年居城を小倉城に移し、中津には忠利を入れた。忠利は1603年から1620年まで中津城の増改築を行った。中津城三の丸西門の石垣には「慶長12（1607）年９月」という文字が刻まれていたという。1620年、本丸・二の丸・三の丸・八つの門と二二の櫓が完成し、現在の中津城の形ができあがったとされている。1632年細川氏が熊本に転封後、小笠原氏が入国する。小笠原氏は中津城下の整備を行い、1652年ほぼ完成したと言われる。その後1717年奥平氏が入国し、1871年まで藩主を勤め、その年、城は取り壊された。

今回調査対象の本丸南西石垣は本丸と三の丸の間に位置している。本丸に通じる道路は明治期に石垣を壊してつくられたものである。道路より西側は、地表面に石垣がそびえるが、東側は昭和24年に、学校敷地拡幅のため現地表面より高い部分は破却され、石は堀に埋められた。

この石垣は全て自然石を利用した布目崩しの技法でつまれており石垣の勾配は52°～58°、反りはなく、真ん中が最も傾き両端が立つ。さらにゆるやかな輪取りも認められた。これらは、この石垣が最も古い時代の要素を満たしていることを示しており、黒田によって築かれた天正時代の石垣が広範囲に残存していることがわかった。中津城と同年に築かれた九州の他の城は、いずれも現存しておらず、天正期の石垣を見ることができるのは中津城唯一つになってしまったのである。



第10図　中津城本丸付近地形図（S=1/5,000）



第11図　石垣工事範囲・調査範囲（S=1/1,000）

2．調査に至る経緯

中津市は、国土交通省「まちづくり総合支援事業」の一環として、中津城本丸と三の丸の間の堀と石垣の工事に平成13年度から着手した。石垣の傷んだ部分を修復し、埋まった堀をほりあげ水を流し、石垣の対岸に遊歩道をとりつけるものである。工事により石垣の文化財的価値を落とすことがないよう、解体前に入念にデータをとり、積み上げる時も当時の技法を復元できるよう細心の注意を払って行った。解体工事では石垣の裏込めの部分までが掘削される。工事には文化財係も立会い、石垣一点一点の調書の作成、裏込めの発掘調査、堀の調査を担当した。以上工事に直接関わる調査は市の単費で行った。しかし、石垣が掘削されるのは裏込めの範囲までとはいえ、中津城石垣の築造年代を調査できる唯一のチャンスであることから、解体調査と並行して、石垣内部の発掘調査も行うこととし、国庫補助事業で対応することとなった。

3．工事の概要

13年度、14年度とG面石垣の復元工事を進めた。石積みの方法を一から学ぶため、工事はスローペースで行われた。専門の先生方の指導を受けながら、積んでは崩すを繰り返し一日平均１㎡の面積を積み上げていった。15年度は二年間かけて習得した技術をもとにして、さらに高度な技術を求められるF面の入角と出角の工事に着手した。F面完成後E面を途中まで積み上げ、H面石垣を掘削した。16年度は、15年度の残りのE面石垣を天端まで積み上げた。またH面石垣は、道路に近い西側から解体工事を行い、地表面近くまで積み上げた。

4．中津城の石垣

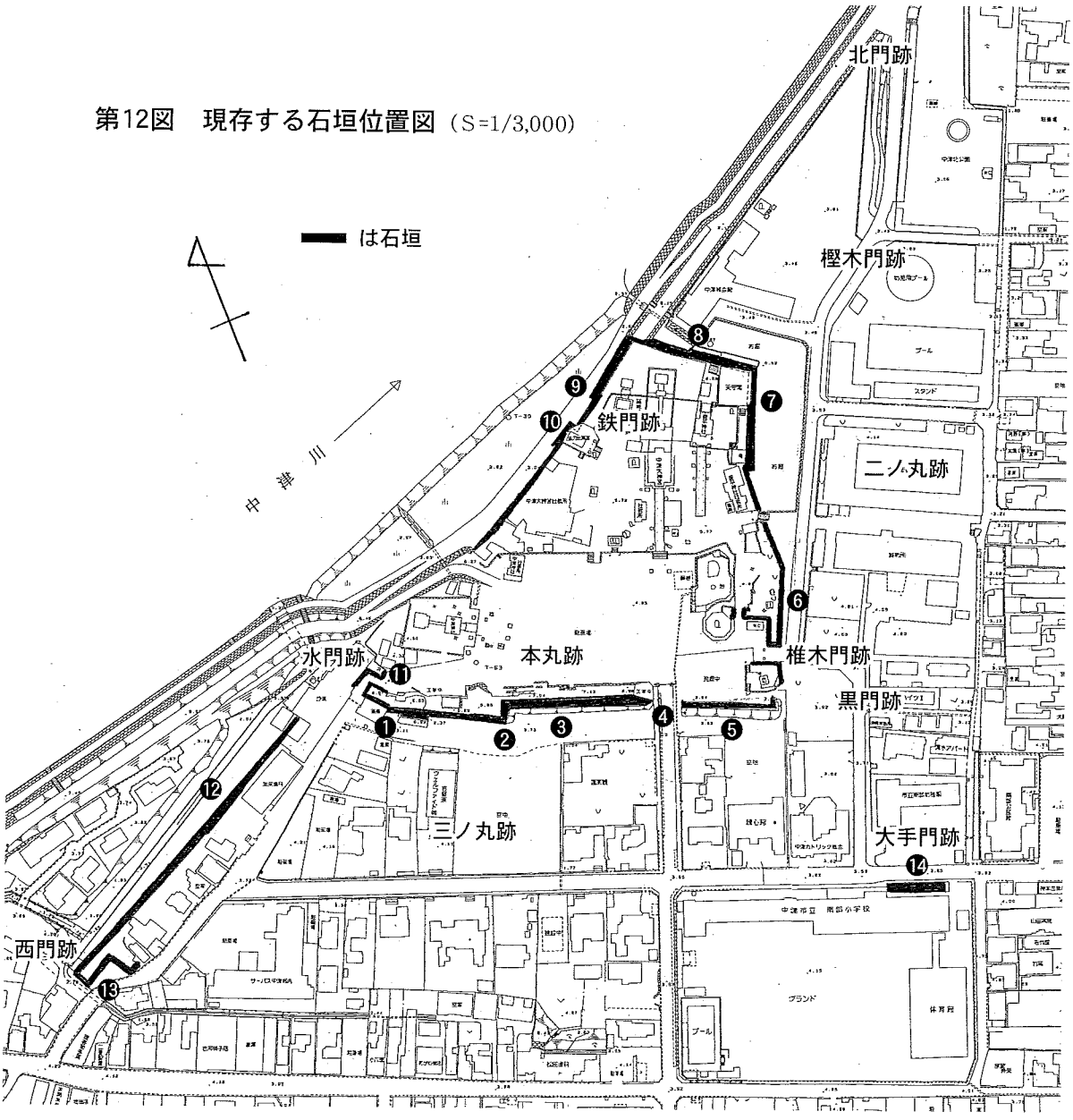
現在調査中の本丸と三ノ丸の間の石垣以外にも、本丸周辺には築造年代の古い石垣が多く残っており、平成16年度からそれらの石垣の写真測量図化作業を実施することとなった。今後も計画的に行う予定である。以下、現在残っている中津城石垣の現況を紹介する。

① E面石垣の水門側

算木積みの出角は四角く整形され、鑿の加工痕がある。しかし、隅脇石は独立しておらず、慶長期ごろの石積みと思われる。築石部は未加工の自然石を使用しているが、天正期のものに比べると、水平方向に長軸をもってくる意識が希薄である。石垣修復工事に伴い写真測量及び図化作業済み。

西側は一部地下に埋まっている部分は掘削できていず、修復工事が中断している。

第12図　現存する石垣位置図（S=1/3,000）



② E面出角部分

E面とF面の間の出角は、下半分が天正期のもので、未加工の自然石のみが使用されている。築石は長軸を水平におき、目地が通らないように積まれている。石垣修復工事に伴い写真測量及び図化作業済みだが、最も石垣の特徴が出る部分である上、築石部に比べ、数段石積みが困難であることから、他の場所よりも細かく図面をとった。傷んでいる部分のみ修復工事済み。

③ G面築石部

地表に露出していた上半分は木の根などで傷みが激しく何度も修復された痕跡があったが、地下は天正期の石垣がそのまま残っていた。石垣は反りがなく、ゆるやかな輪取りも認められた。修復工事に伴い写真測量図化作業を行った。傷んでいる部分のみ修復工事済み。

④ G面石垣東断面

G面石垣とH面石垣は本来つながったひとつの石垣である。明治4年に石垣を壊して道路が造られたため、石垣が途中で途切れている。工事中、断面から旧石垣の裏側の石垣を検出した。石垣が城内方向に拡幅されていく様子が明瞭にわかる貴重な資料であることから、平成17年度に、まちづくり総合支援事業の一環として断面を現位置で保存し、露出展示することとなった。

⑤ H面石垣

本来G面と続いていた石垣。戦後、上半分を破壊されてしまった。西側は古い特徴を有すが、東側の櫓台跡は石の積み方も雑で、鑿で加工された石を使用していることから、江戸時代中期以降に造りなおされたものと思われる。修復工事に伴い写真測量図化作業を行った。西側部分は傷んでいる部分のみ16年度に解体し、地表面付近まで積み上げた。17年度は東側部分の工事にとりかかる。

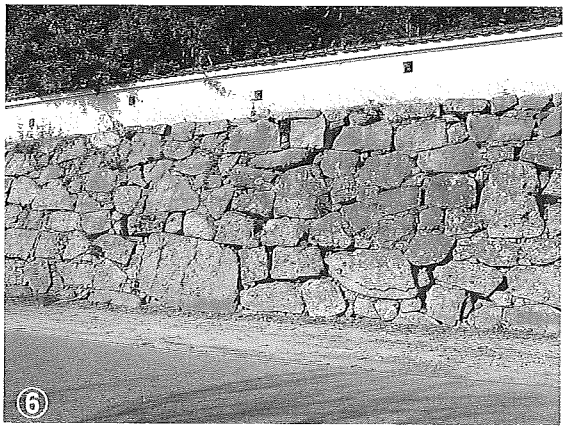
⑥　椎ノ木門東側の石垣

自然石を用い矢穴も大きいことから、古い年代が考えられるが、かなり後世に積み替えがなされ、落し積み等の乱れた場所が多い。本丸に入る入り口であるため、石の平たい大きな面を表にむけた鏡積みも見られる。天端面に樹木が植わっており、根による大きなハラミが見られ、大変危険な状態である。国庫補助事業により平成17年度に図化予定である。

⑤

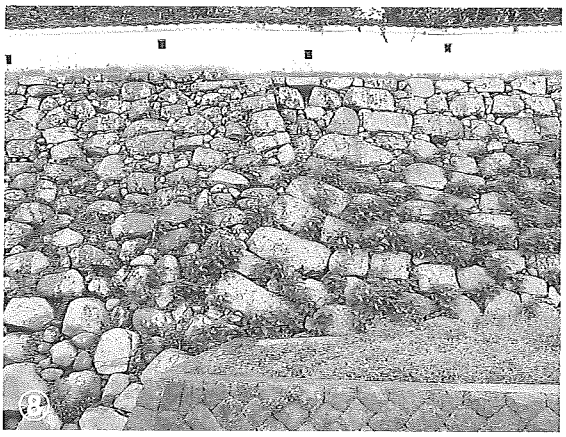
⑦　模擬天守閣東側の石垣

本来中津城に天守閣があったかどうか定かではない。現在の天守閣は模擬天守であり、天守閣を支える石垣は、古い石垣の上に昭和に足して積み上げたものである。下に残る古い石垣は、細川時代のものといわれている。


⑥

⑧　本丸北側の石垣

本丸北側には、石垣にy字状の明瞭な目地が通る場所がある。向かって右の石垣が左の石垣の下に入る。右が黒田の時代、左が細川の時代といわれている。細川の時代の石は丸みを帯びた自然石で、黒田の時代の石垣は、以外にも四角く成形された石が多用されている。これは、山国川の川上に7世紀の神護石列石の遺跡（福岡県大平村唐原神護石）があり、その石を使用しているためといわれている。平成16年度に国庫補助事業により写真測量図化作業を行った。


⑧

⑨　本丸西側の石垣

本丸西側の石垣も黒田時代の石垣と推測される。北側と同じく神護石が多用されている。平成16年度に国庫補助事業により写真測量図化作業を行った。

⑩　本丸西側櫓台の石垣

本丸西側には鉄門跡があるが、今は塞がれている。鉄門跡の南側には黒田時代とされる櫓台がある。築城当初は、この場所に三層ほどの櫓が建っており、それが天守閣だったのではないかという説がある。

⑨

平成16年度に国庫補助事業により写真測量図化作業を行った。

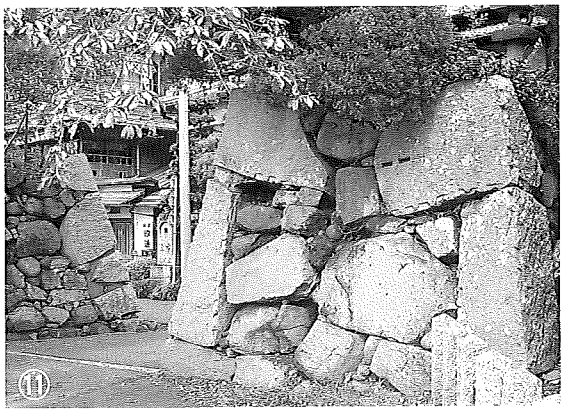
⑪　水門の石垣

８つの門が全て完成したのが、細川時代の1620年といわれている。水門もそのころまでにできた門で、使用されている石の矢穴の特徴や、積み方より、当時のものと思われる。しかし、後世に修復されており、コンクリート等で補強されている場所もある。本丸に入る者に威容を示すため、大きな縦石積みが認められる。

⑪

⑫　水門と西門の間の石垣

三ノ丸の西側を囲む石垣である。石垣の上に建物が建ち、民有地となっている上、石垣の前は水路で湿地になっていることから人がそばに近づけず、樹木、草で覆われている。古い積み方が残っているようだが、十分観察ができていない。開発を防ぐためにも、早急な調査が必要である。


⑫

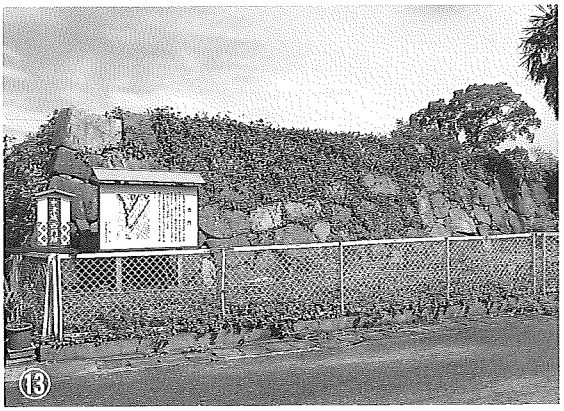
⑬

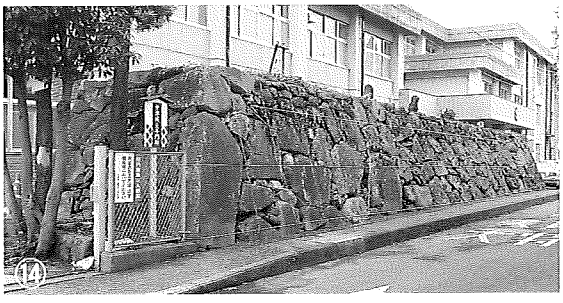
⑬　西門の石垣

西門は細川時代の造営で、石垣には以前「慶長十二年九月」という文字が刻まれていたという。傷みがあり、近年一部修復を行ったという。

⑭　大手門につながる石垣

現在南部小学校の敷地内に残る石垣は、大手門につながる石垣の一部である。傷んで危険な状態だったため、平成16年度にまちづくり総合支援事業で修復工事を行った。解体の結果、櫓台をつくり後に西側へ石垣を継ぎ足していったことがわかった。築造年代は16世紀末～17世紀初頭が考えられる。城の玄関口でもあり、石垣には鏡積みが認められた。


⑬


⑭

5．これまでの調査の概要

13年度は石垣の天端をさげ、城内側の新しい石垣・コンクリートをはずし古い石垣を検出した。E面の裏側では17世紀後半代の遺物が出土する溝状の石列を検出した。またG面の入り角近くにあった忠魂碑を撤去した下から櫓台跡、階段が見つかった。

14年度は忠魂碑下をさらに掘り下げ、城内側を向いた創建期の石垣を検出した。さらに大鳥居西調査区の石垣断面からも城内側を向いた古い石垣が検出された。調査の結果、中津城石垣は、最低４段階を経て拡幅されていることが判明した。堀側の石垣は創建期のままで、徐々に城内側にのみ拡幅され、高くされていた。また、椎ノ木門南調査区からは巨大礎石が見つかり、黒田期の礎石建物の存在が推定されるに至った。

15年度は出角から西側の石垣（E面石垣）を解体し、14年度に10区調査区、大鳥居西調査区で見つかったⅠ期Ⅱ期石垣に連続する石垣を標高約4.3mで検出した。石垣には、排水溝があり、城内の水を堀に排水していた。また、現石垣は東端の水門まで連続するが、解体したところ、途中で屈曲し途切れていた。さらに石垣の構造を観察するためトレンチを入れたところ、石垣が途切れた場所から礎石建物遺構を検出した。出土した遺物より礎石建物は黒田の時代のものと考えられる。15年度調査では、建物は一部を検出したのみで、残りは16年度に行うこととなった。また、椎ノ木門南調査区では、平行する二条の溝がL字状に屈曲する方形居館跡を検出した。時代は出土遺物より16世紀後半が想定される。黒田入部以前、中津城は大友方の拠点のひとつであり、椎ノ木門南調査区内の方形区画は大友支配下の城跡と考えるのが妥当であろう。

また、発掘調査とは別に、現在の中津城及びその周辺の現況を記録し、今後の調査の基礎資料とするため、平成15年度に、平板測量による1/1000平面図を作成し、現存する石垣の位置を明記した。平成16年度には、石垣の写真測量を椎ノ木門跡周辺と本丸の北側、西側の鉄門跡周辺で行った。今後も計画的に測量を行う予定である。

6．16年度調査の概要

(1) E面石垣の礎石建物

15年度調査で、E面石垣に設定した第３トレンチから礎石建物遺構が検出された。１号礎石建物は一度建替えられていた（２号礎石建物）。また、平成13年度に水門付近でも一列の石列がみつかった（３号礎石建物）。16年度は、未掘部分の調査を行った。

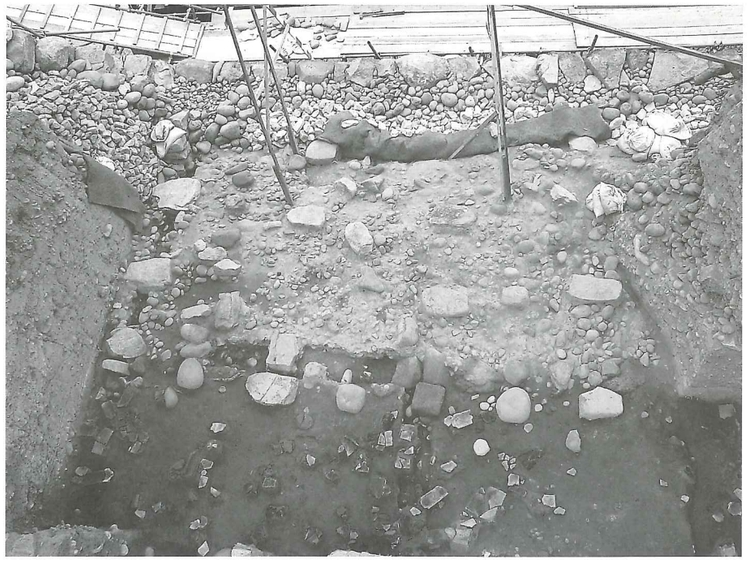
[１号礎石建物] 桁行（長手方向）約5.9m、梁行（短手方向）3.75m、３間×３間の長方形建物。

梁方向が石垣上まであるとすれば、5.9m×5.0m、3間×4間となる。

桁行きの柱間間隔は桁行約1.98mで、１尺＝303mmの曲尺で約６尺５寸。それをさらに半間に割る礎石が北側に配置されており、石の間隔は約１mである。１間ごとの礎石は石垣と同じ花崗岩、半間ごとの石は丸い安山岩である。梁行きの柱間間隔は1.25m。

[2号礎石建物] 桁行（長手方向）約5.9m、梁行（短手方向）4.45m、３間×３間の長方形建物。

梁方向が石垣上まであるとすれば、5.9m×5.4m、３間×４間となる。１号建物と同じく、北側に約１mの半間ごとに石を配す。梁行きの柱間間隔は1.485m。４間とすれば、最も堀側の１番礎石から石垣上までは0.99m。床面中央は土が大変硬くつき固められており、土間状であったと思われる。



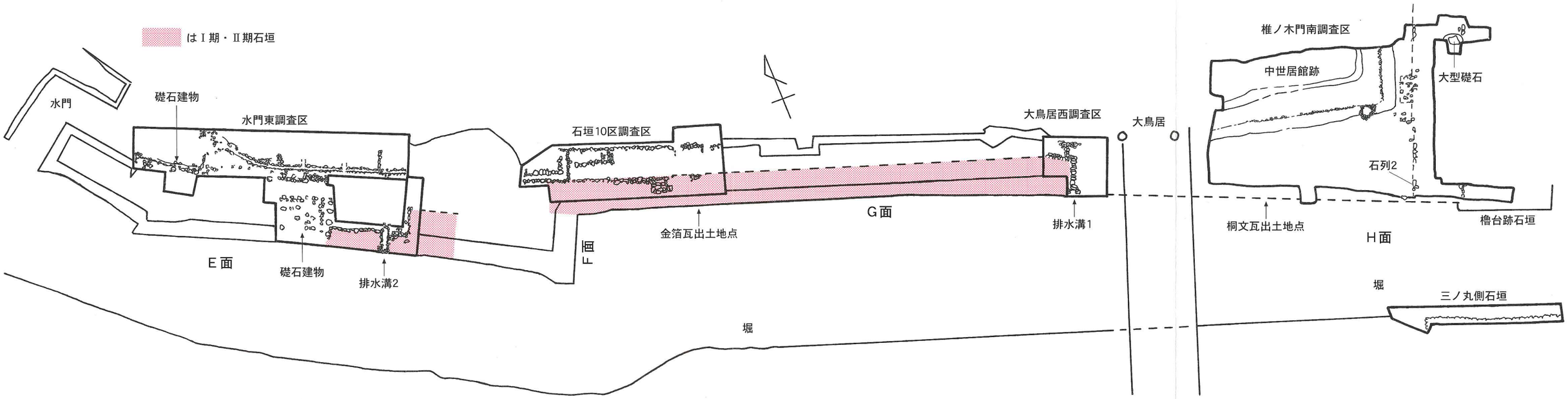
E面石垣内の1号・2号礎石建物

E面石垣内の礎石建物北側石列

礎石No.16～20

礎石No.25～27

（礎石No.は第16図参照）



第13図　遺構配置図（S=1/500）

北側桁行きの礎石である４、16、25はそれぞれ下に５、17、26が重なっており、当初建て替えの痕跡と考えていた。しかし、石の重なる部分は北端の一列のみであること、北側は床面が南側より若干低くなり、石を重ねてちょうど高さがあうこと、18、19、20などの石は土間状につき固められた土に埋まっていたこと、18、19、20、27は水平ではなく、よせられたような状態で検出したことなどから、18、19、20、27は２号建物の礎石を据えるときにはじかれて、重量がかかり且つ床面の低い北端の石を二つ重ねにして補強したのではないかと考えるにいたった。

［３号礎石建物］東西方向の一辺しかわからないため全形は不明。４間約４ｍが検出されている。柱間間隔は上記と同じく約１ｍ。１、２号礎石建物よりやや北側に張り出す。この礎石の南側は平成13年度にトレンチを一本いれており、側柱のみの建物であることを確認している。

上記の他に、1、2号と3号の間には一つだけ方形で平らな、礎石と思われる石（第16図28番）がある。３号建物とほぼ横一列に並ぶ配置をとる。発掘できていないが、１、２号と３号の間に建物がありそうである。また、１、２号建物の北側には、石列や石敷きがある。石敷きと１号石列は１号建物に伴い、２号石列は２号建物に伴う。

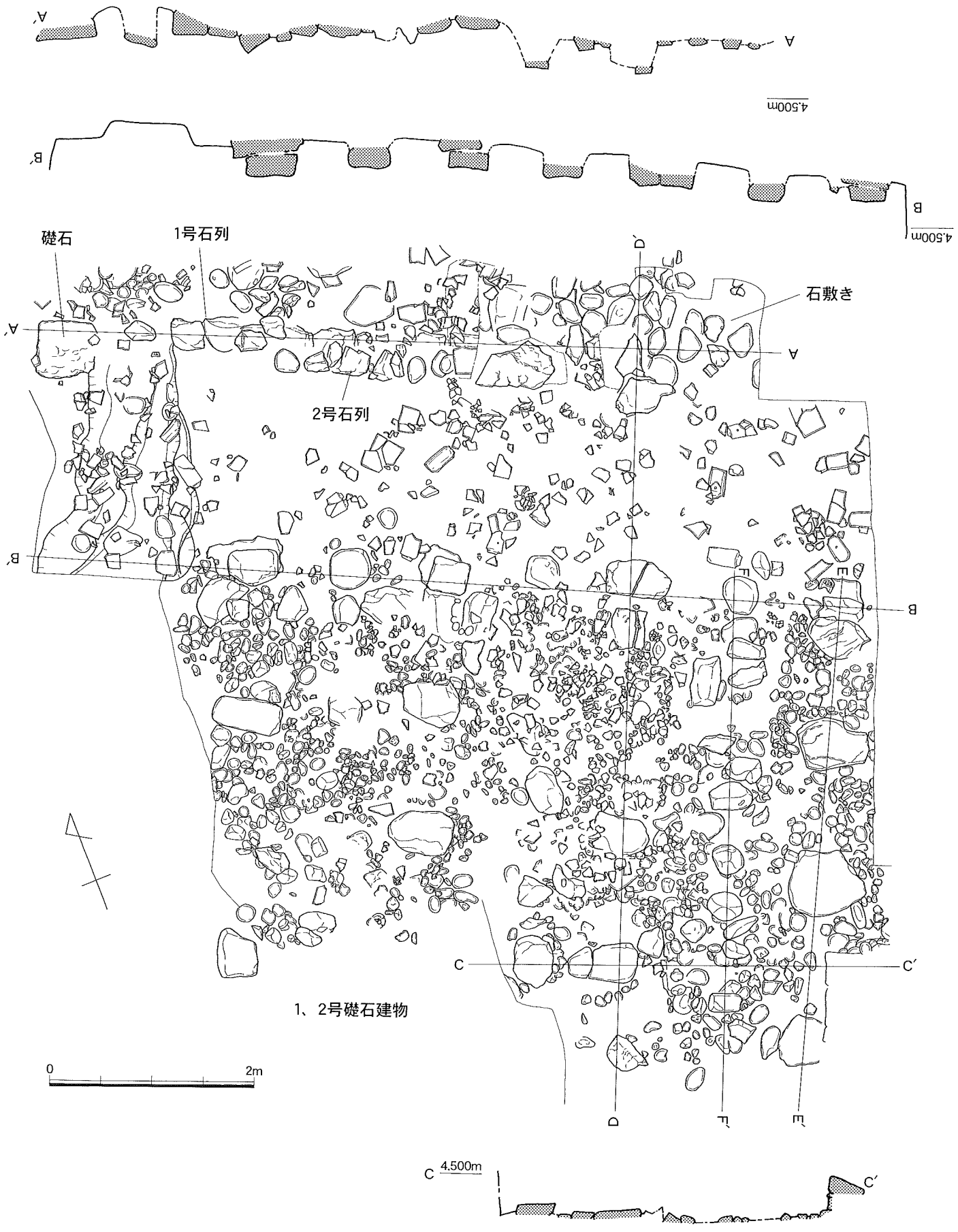
礎石建物に伴う出土遺物は中国製磁器、朝鮮製陶器、古唐津、瀬戸・美濃産の皿や天目茶碗、備前焼の甕等で16世紀後半代に収まる。

これまで解体復元工事を行ってきた本丸南側の東西方向の石垣は、築城当初は今回の調査区までしかなく、調査区から水門までは、現在より約３ｍ低い標高約４ｍまでであったことがわかった。低い石垣の上には礎石建物が建っており、石垣と構造的に一体となったものであると思われる。

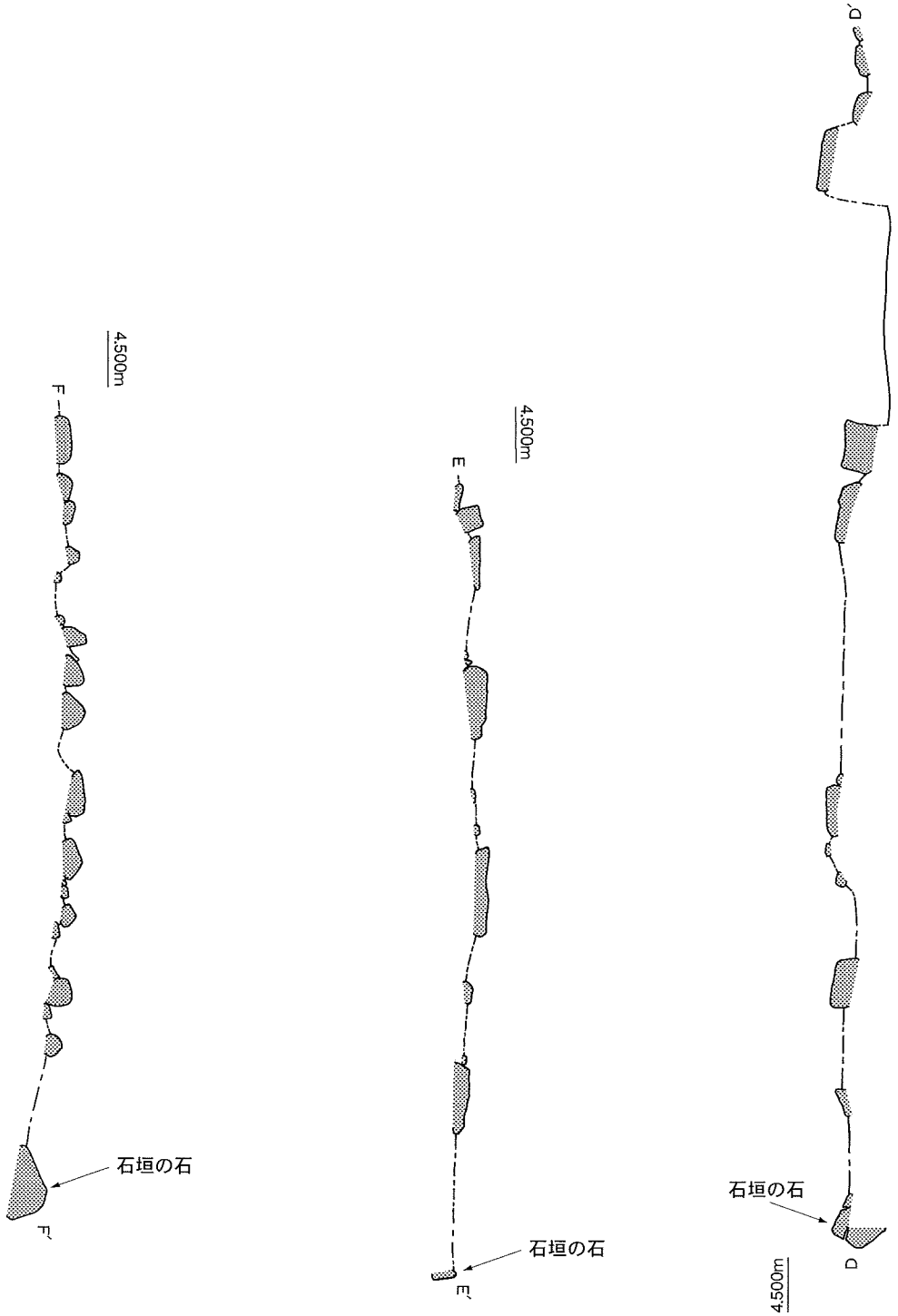
第16図は、上が解体前のE面石垣、下が同じ場所の石垣内部の平面図である。解体前を見ると、石垣にいくつか目地が通り、積み方が異なる様子が観察できる。東側の天正期の石垣は、西側に比べそれぞれの石が細長く、水平にすえている。積み方の変わった場所から、１・２号礎石建物跡が検出されており、西側は建物廃絶後に継ぎ足された石垣であることがわかった。東側でも、旧石垣の天端高である5,800mに水平に横目地が通り、上部の石は後に継ぎ足されたことがここでも確認できた。旧石垣内には、排水溝の出口も顔を出していた。解体前の石垣観察が、石垣内部の情報をつかむのにどれほど重要かを示す例である。

礎石建物の特徴は、①通り抜けるには柱の間隔が狭すぎることから門とは考えにくい。②総柱建物であることから、ある程度重量のある建物であった。③半間間隔で礎石が並ぶ頑丈な外壁をもっていた。④厚い軒瓦を使用した瓦葺建物で、城内側からは石列、石敷きの導入部があった。⑤中国製の焼き物や茶器など石垣の他の箇所ではあまりみられない遺物が集中していた。⑥同位置で建て替えられており、さらに複数の建物が並んでいた。の以上６点である。部分的な調査でありはっきりしたことはいえないが、建物は瓦葺の櫓で、茶碗などを収納していた倉庫や門近くの詰め所のような役目をしていたと考えられる。

中津城は九州最古の近世城郭であることから、今回検出された建物も近世城郭の礎石建物としては最古のものであるといえる。中津城は豊臣秀吉の命をうけ入国した黒田孝高が豊前の国の拠点として真っ先につくった城である。豊臣政権下、新しい技術として九州に持ち込まれた近世城郭の初期の構造を知る貴重な資料である。



第14図　E面礎石建物平面図・断面図（S=1/50）



第15図　E面礎石建物断面図（S=1/50）

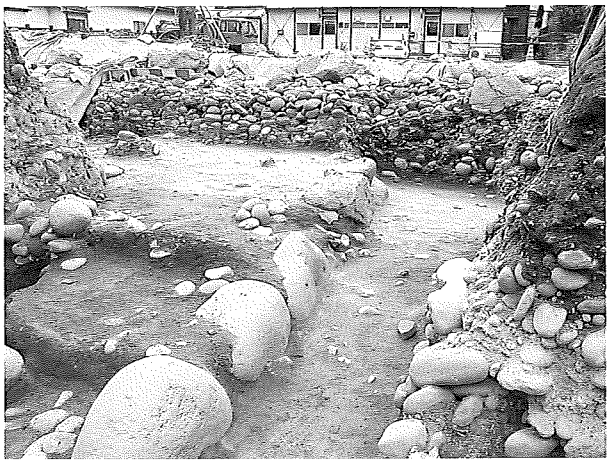
(2) 椎ノ木門南調査区

椎ノ木門南調査区では、これまでに黒田時代の建物の一部と推定される大型礎石が出土し、築城当初の遺構面が良好に残存していることが確認できた。さらに、黒田時代の下層からは、中世段階（15～16世紀）の遺構面を確認し、方形居館の一部を形成するL字状の溝を検出したが、15年度の段階ではコーナー部が未検出のままであった。16年度はH面石垣の解体工事が行われたため、工事に先立ち15年度調査区とH面石垣との間を掘削し、かつ中世遺構の検出につとめた。

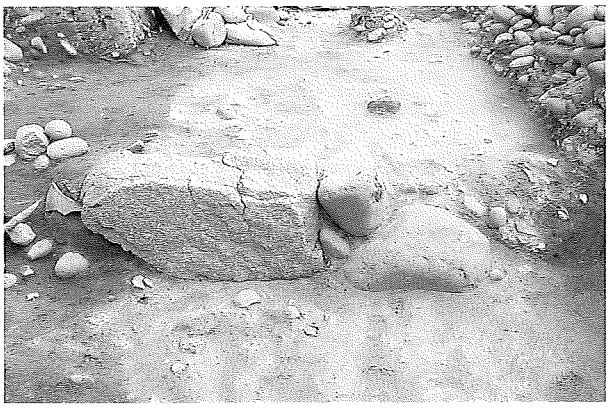
その結果、井戸の東側で中世溝のコーナー部を検出した。溝内は、外側の壁面は素掘りのままだが、内側の壁面からは石積みを検出した。昨年度検出した溝も内側の壁に石が貼り付けてあったことから、その続きと判断した。

また、黒田時代の大型礎石建物を囲む石列２の堀石垣側へのびる続きを検出した。当初、石列2は堀近くで東側へ90度に屈曲することを予測していたが、そのまま旧石垣の裏側へ連続しているようで、建物の南側は石垣で限られていたようである。石列２の石も堀近くのものは細長く他よりも大型で、石垣と同じ花崗岩であったことから、旧石垣へ上る石段の一部ではなかったかと考えている。調査区のH面石垣寄りの場所では、黒田時代、中世段階とも、明確な遺構は検出できなかった。

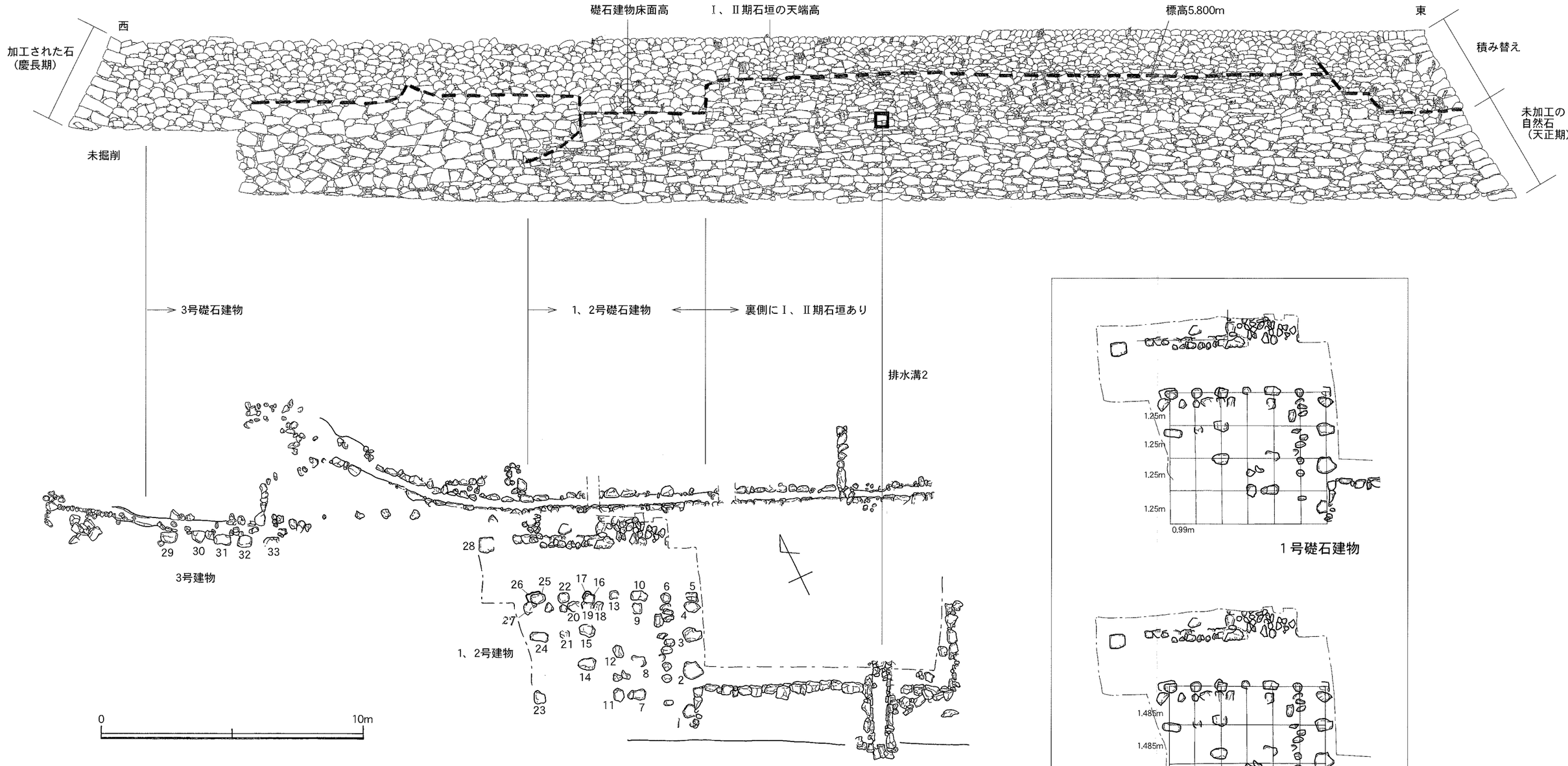
中世溝コーナー部



石列２（北→南）



石列２（西→東）



第16図　E面石垣立面図・平面図（S=1/150）

7．中津城跡出土軒瓦の型式分類

平成13年から行っている中津城の調査では、調査面積が少ないながら、多くの瓦が出土している。中津城は九州最古の近世城郭であり、調査により、黒田、細川期の石垣や建物跡が残存していることがわかった。出土瓦の文様には他地域出土の瓦と同じものがいくつか見受けられた(注1)。

瓦の分類は築造年代の解明、当時の流通や瓦工人の実態などを探る上で重要な資料である。現在まだ調査中であり、今後も多数の瓦が出土すると思われるが、全体の様相を把握するため、現時点で可能なかぎりの型式分類を行うこととした。ゆえに、分類番号は今後若干変更する可能性がある仮番号であることをご理解いただきたい。

(1) 軒平瓦

軒平瓦は中心飾りの形態より大きく９つに分類した。一部拓本を合成したものもある。

① １類；桐文

桐文は桐文が葉のみのもの（A）と、葉・茎がそろっているもの（B）の二種類がある。

[１－Ａ１類] 中心飾りが三枚の桐葉のみのもの。葉脈は線描きされ、両端の葉は先端が外に反る。唐草はやや太く、短く巻きが強い。文様帯厚は2.0cm。小倉城から同笵の瓦が多数出土しており、1587～1595年の時期幅が想定されている。

[１－Ａ２類] １類とほぼ同じ文様だが、葉脈はやや立体的に描かれる。葉の先端は文様帯の外にはみ出る上、第３唐草の頭部はなく、線のみとなっている。文様帯厚は1.8cm。

[１－Ｂ１類] 桐文が、葉・茎・花と全てそろっている。三本の茎に花が３つずつつく。３回転の唐草は巻きが弱く、頭部が玉状に太くなる。文様帯厚は2.0cm。

② ２類；宝珠文

[２－Ａ１類] 中心飾りに宝珠文を配す。宝珠は線描きで、内部の横線は３本で水平に硬直化している。３本の唐草は線状にのび、先端でやや上に湾曲する。文様帯厚は1.7cm。

③ ３類；不明植物文

[３－Ａ１類] 中心飾りは左右に３つずつ、中心に一つの山型。一本杉か、梶の葉を図案化したものだろうか。３本の唐草は肉彫りされ、のびやかに回転する。文様帯厚は2.3cm。高森城からも同笵瓦が出土している。

[３－Ａ２類] A1類の文様が簡略化されたもの。中心飾りは単純な山型が左右に連続する。中津城石垣からと大手門前の御用屋敷跡から出土した。文様帯厚は2.3cm。名護屋城のX－１C類と同笵。

④ ４類；三葉文

三葉文は中心飾りが三本の線のみで表現されるもの（A）と、三葉文の先端が枝分かれするもの(B)と、中心の葉のみが枝分かれし両端に珠文を配すもの（C）の三種類がある。

[４－Ａ１a類] 三葉文は脇葉が内湾し、中央の葉の先端がひし形にとがる。唐草はゆるやかに二回転のびる。16世紀後半～17世紀初頭のⅠ期、Ⅱ期石垣の根石付近から出土する。中津城軒平瓦の中でも出土点数は２番目の多さである。文様帯厚は2.3cm。名護屋城Ⅰ－４Ba類と同笵。小倉城でも同笵が認められる。

［４－Ａ１ｂ類］第一唐草の下に珠文がつく。左端の第二唐草の巻きが１aより強いが、他の模様の間隔や瓦の焼きの質などは全く同じで、同じ版木を掘りなおした可能性もある。量的にも１aとほぼ同じ割合で出土する。Ⅰ期、Ⅱ期石垣に伴う瓦敷きに使用されていたことから、初期の段階の瓦と考えられる。文様帯厚は2.2cm。小倉城でも同笵の瓦が出土している。

［４－Ａ２類］Ａ－1類とほぼ同じ模様だが、横幅が短く、中心飾りが小ぶりである。三葉文の先端は三本とも点状にふくらむ。文様帯厚は2.1cm。

［４－Ａ３類］中心飾りの三葉文が湾曲せず、幅広である。唐草は反転せず、下方に二回強く巻く。文様帯厚は1.7cm。

［４－Ａ４類］中心飾りは湾曲せず直線的。唐草はわずかに湾曲するのみで、一つしかない。小倉城から同笵と思われる瓦が出土している。文様帯厚は1.6cm。

［４－Ａ５類］Ａ１類と同じだが小さめの中心飾りで、第一唐草が肉彫りになる。文様帯厚は1.8cm。小倉城から同笵と思われる瓦が出土している。

［４－Ａ６類］Ａ５類より中心飾りが外に開く。やはり第一唐草が肉彫り。第二唐草は強く巻く。文様帯厚は1.9cm。

［４－Ａ７類］Ａ６類をさらに小さくした中心飾りをもつ。文様帯厚は1.7cm。

［４－Ｂ１類］中心飾りの脇葉が外に反り、三葉のそれぞれの先端が枝分かれする。他の軒平瓦と比べて、格段に大きく、分厚い。出土点数が多く、E面の礎石建物が廃絶しパックしている層から出土している。また、城下町の殿町地区からも出土した。文様帯にいくつかの明瞭な笵傷があり、同笵関係が判別しやすい。小倉城からも同笵瓦が出土している。文様帯厚は3.1cm。

［４－Ｂ２類］中心に三つに膨らんだ花を持ち、左右の脇葉は二つに枝分かれする。中心飾りの基部から唐草がのびやかに出、第一唐草は先端が枝分かれする。文様帯の横幅が大変狭い。文様帯厚は2.9cm。

［４－Ｂ３類］Ｂ２類と同じ文様だが、線の幅が太く、硬い印象。文様帯厚は2.8cm。

［４－Ｃ１類］中心の枝分かれした花芯の両端に珠文がある。第一唐草はのびやかに中心飾りの基部から出る。第一唐草と第二唐草は分離している。文様帯厚は2.8cm。小倉城にも似た文様があるが、細部で異なる。

［４－Ｃ２類］Ｃ１類とほぼ同じだが、第一唐草は中心飾りの基部から分離する。第二唐草は第一唐草に接地する。Ｃ１類に比べて硬い印象。文様帯厚は2.3cm。

［４－Ｃ３類］Ｃ２類とほぼ同じだが、第二唐草は第一唐草と分離する。文様帯厚は1.8cmと、より狭くなる。

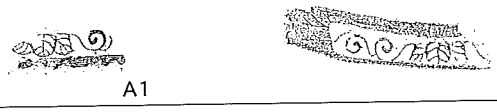
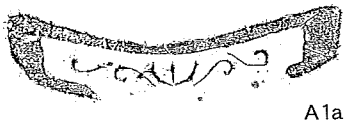
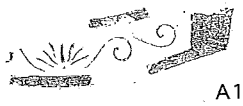
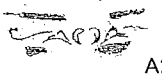
⑤　五葉文

［５－Ａ１類］第一唐草は中心飾りの基部から出る。第二唐草は脇葉の先端から始まり、第三唐草は第二唐草の先端から出る。最も多量に出土している文様で、E面の礎石建物を覆う層や、Ⅰ期、Ⅱ期石垣に伴う瓦敷きに使用されていた。文様帯厚は2.4cm。名護屋城のⅡ－１C類と同笵。

［５－Ａ２類］中心飾りは細い線で描かれ、中心の先端が二つに分かれる。第一唐草は中心飾りの基部から伸びる。Ａ１類を簡素化した模様である。文様帯厚は2.5cm。

第１表　中津城出土軒平瓦の型式分類表

縮尺（1/6）

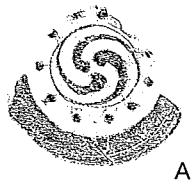
型式		拓本
1	桐葉文	 A1　A2 B1
2	宝珠文	A1
3	不明植物文	A1　 A2
4	三葉文	 A1a　 A1b A2　 A3　 A4 A5　 A6　 A7 ● B1　 ● B2　 B3 C1　 C2　 C3
5	五葉文	A1　 A2
6	七葉文	 A1　 A2　 A3
7	九曜文	● A1
8	抱き二葉文	A1　  A2
9	小花文	A1　 B1　 C1　 D1　 E1

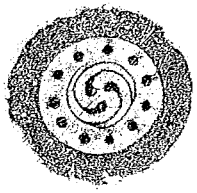
● は合成

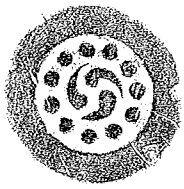
第２表　中津城出土軒丸瓦の型式分類表（1）

縮尺（1/6）

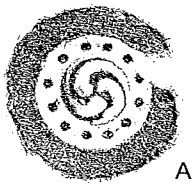
R-11


A

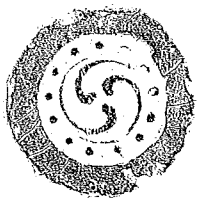

B

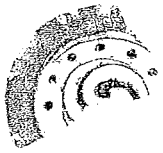

C

R-12


A

R-13

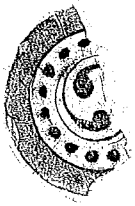

A


B

R-15

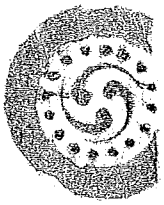
A

R-16


A

B

C


D

R-17

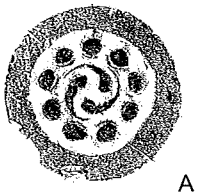
A

B

桐　文

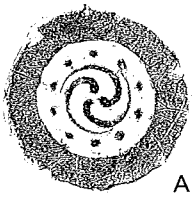
第３表　中津城出土軒丸瓦の型式分類表（2）　　縮尺（1/6）

L-9

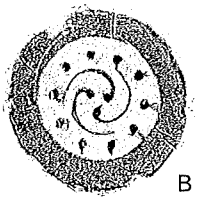


A

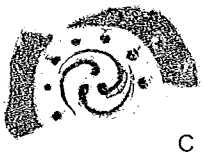
L-10



A

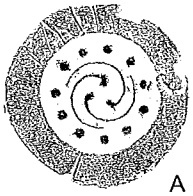


B

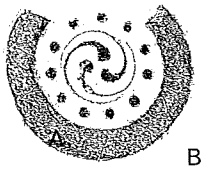


C

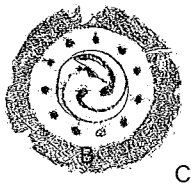
L-11



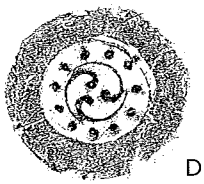
A



B

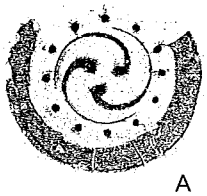


C

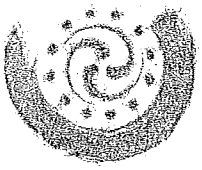


D

L-12

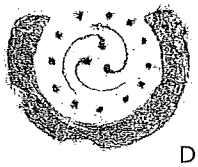


A

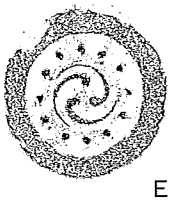


B

C

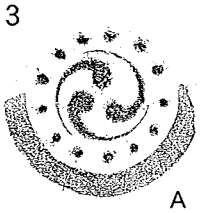


D

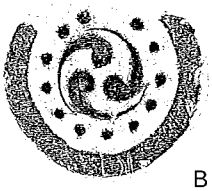


E

L-13

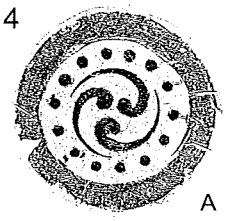


A

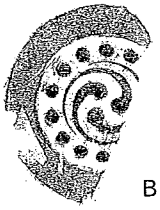


B

L-14



A

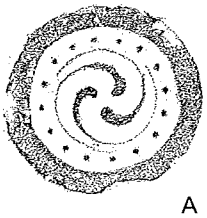


B

L-15

A

L-16

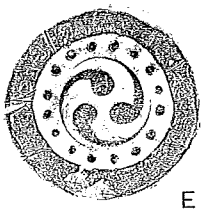


A

B

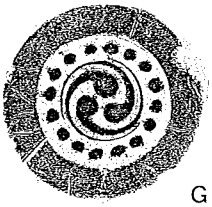
C

D



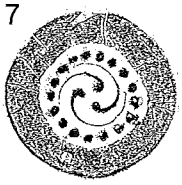
E

F



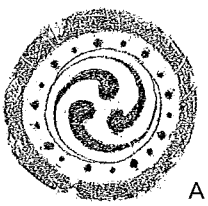
G

L-17



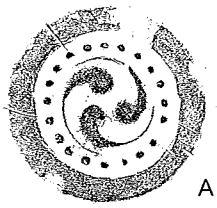
A

L-18



A

L-20



A

⑥　七葉文

［6－A１類］中心飾りは細い線で描かれ、基部には珠文を配す。文様帯厚は2.7cm。名護屋城のXⅠ－１類と同笵。

［6－A２類］中心飾りが幅広になり、先端がとがる。文様帯厚は2.7cm。

［6－A３類］２類と同じく幅広の中心飾りを持つが、より扁平になる。脇葉は短く、文様帯の横幅も短い。文様帯厚は2.1cm。

⑦　九曜文

［7－A１類］中心飾りが九曜文。文様帯厚は2.3cm。小倉城にも同笵瓦あり。

⑧　抱き二葉文

［8－A１類］中心飾りの二葉は肉彫りで短く内湾する。唐草と、肉彫りの葉が脇につく。文様帯厚は1.7cm。小倉城にも同笵瓦あり。

［8－A２類］A１類よりも脇の肉彫りの葉が短く、中心飾りの基部と分離する。文様帯厚は2.0cm。小倉城にも同笵瓦あり。

⑨　小花文

［9－A類］中心飾りが十字の小花で、第一唐草は中心飾りの上から始まる。文様帯厚は2.5cm。小倉城にも同笵瓦あり。

［9－B類］中心飾りが小さなおそらく5つの点で作られた小花。大変薄い瓦で、唐草一本と肉彫りの短い葉がつく。文様帯厚は1.3cm。小倉城にも同笵瓦あり。

［9－C類］中心飾りは肉彫りで、おそらく５枚。中央に珠文を配す。文様帯厚は2.3cm。

［9－D類］中心飾りは肉彫りで、花の先端は３つに分かれる。文様帯厚は2.5cm。

［9－D類］中心飾りの花は面的で、中央の珠文はない。唐草はいずれも短い。

(2)　軒丸瓦

軒丸瓦は、桐文が１点出土した以外は、全て三つ巴文である。左回りをL、右回りをRとし、その後に珠文の数を続けて分類記号とした(註2)。左回りの軒丸瓦は、珠文の数が9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、20の11種類。右回りは、珠文の数が11、12、13、15、16、17の6種類。文様の種類、総点数とも左三つ巴の方が多い。丸瓦については、まだ他地域の瓦と比較検討ができておらず、今回は紹介するにとどめたい。

(注1) 名護屋城の瓦は元名護屋城博物館の宮崎博司氏より、小倉城の瓦は北九州芸術文化振興財団の佐藤浩司氏よりご教示いただいた。高森城の瓦は宇佐市教育委員会の江藤和幸氏より、拓本を見せていただいた。

(注2) 宮崎博司「名護屋城跡出土の軒丸瓦」『研究紀要第３集』佐賀県立名護屋城博物館　1997　の分類方法を参考にさせていただいた。

8．まとめ

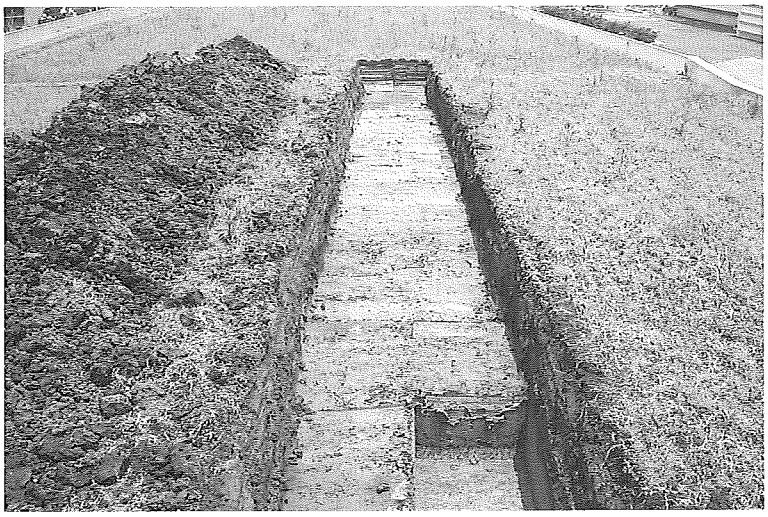
今回の概報では、軒平瓦、軒丸瓦の紹介を行った。文様を比較する中で、同じ時期の瓦と考えられるのが、Ⅰ期、Ⅱ期石垣に伴う瓦敷きに使用されていた瓦である。これまでの調査で、出土遺物からもⅡ期石垣は17世紀第１四半期までに埋められたと考えられる。G面石垣内で検出されたⅠ期石垣にのぼる階段の前の瓦敷きに使用されていたのは、軒平瓦では4－Ａ１a類、4－Ａ１b類、5－Ａ１類、軒丸瓦ではL－16A類である。4－Ａ１a、4－Ａ１bは小倉城と、4－Ａ１b以外は名護屋城と同笵関係が認められており、L-16Aは、高森城からも同じ瓦が出土している。高森城は天正15（1588）年、黒田如水が弟の利孝を宇佐郡に派遣して築かせた城である。宇佐郡支配のための防衛拠点としての城で、石垣はなく、土塁と一体となる礎石建物が検出されている。軒平瓦３－Ａ１類も高森城と同笵で、この退化形態の文様ともいえる軒平瓦３－Ａ２類が中津城と名護屋城で出土している。

今後は中津城の資料を充実させるだけでなく、他地域との比較検討にも積極的に取り組む必要がある。いまだ整理途中の段階で、分類を試みるのはためらいがあったが、資料を提示することで一歩前に進めるとの想いから、今回の概報に掲載することとした。

さて、中津城の石垣調査に着手して、丸三年が経過した。これまで、石垣の解体・復元を経験し、工事に伴い石垣内や城内の調査を国庫補助で行うことができ、貴重な体験をする機会にめぐまれた。最初は何も見えない手探りの状態であったが、経験を重ねるにつけ、最初見過ごしてしまったことに後から気付き後悔をする連続である。幸い石垣構築の過程を知る遺構、遺物の検出が相次いでいる。近世城郭史の中でも重要な中津城を調査研究することは、一部の考古学研究者のためではなく、市民みんなの喜び、利益につながるものだという視点を我々行政の人間は認識すべきである。2005年３月１日、旧下毛四ヵ町村と合併し、新中津市が誕生した。旧下毛郡域には、黒田氏ゆかりの史跡も点在しており、中津城調査が新市の人々の楽しみとなり誇りとなれるよう取り組みたいと思う次第である。

図版１　沖代地区条里跡

上安地区
トレンチ状況
西→東

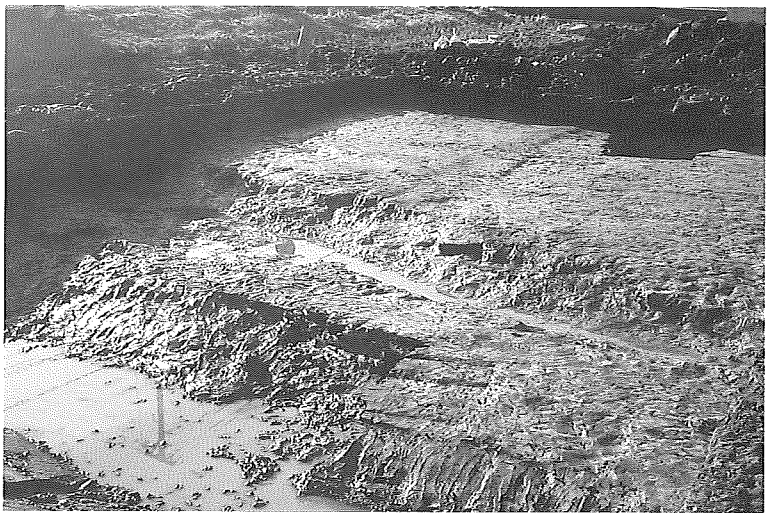


上安地区
トレンチ状況
南→北

上安地区
トレンチ東壁土層

図版２　沖代地区条里跡

竹ノ下地区
調査前風景
西→東



竹ノ下地区
西側トレンチ全景
東→西

竹ノ下地区
溝（SD-01）全景
南→北

報告書抄録

書名	沖代地区条里跡（おきだいちくじょうりあと）　上安地区（うわやすちく）・竹ノ下地区（たけのしたちく） 中津城本丸南西石垣（なかつじょうほんまるなんせいいしがき）（Ⅳ）
副書名	2004年度中津地区遺跡群発掘調査概報
巻次	17
シリーズ名	中津市文化財報告
シリーズ番号	第37集
編著者名	高崎　章子　　浦井　直幸
編集機関	中津市教育委員会
所在地	〒871-8501　大分県中津市豊田町14-3　TEL 0979-22-1111
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
沖代地区条里跡 上安地区	大分県中津市 大字万田 489-1他	44203	101007	33° 34′ 34″	131° 11′ 11″	20040701	64㎡	集合住宅 建設
沖代地区条里跡 竹ノ下地区	大分県中津市 中央町1丁目 851-4他	44203	101007	33° 35′ 18″	131° 11′ 28″	20041111 ～ 20041216	98㎡	集合住宅 建設
中津城 本丸南西石垣	大分県中津市 1278-1	44203	101001	33° 36′ 10″	131° 11′ 16″	20040701 ～ 20050331	580㎡	保存整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖代地区条里跡 上安地区	なし	なし	なし	なし	
沖代地区条里跡 竹ノ下地区	集落	古墳・古代	溝	須恵器	
中津城 本丸南西石垣	近世城郭	中世 江戸時代	石垣、礎石建物跡方形居館跡	瓦、陶磁器、土器	石垣内部に礎石建物 黒田築城前の中世遺構検出

沖代地区条里跡　上安地区・竹ノ下地区
中津城本丸南西石垣（Ⅳ）

中津市文化財報告 第37集

2005年３月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　㈱川原田印刷社